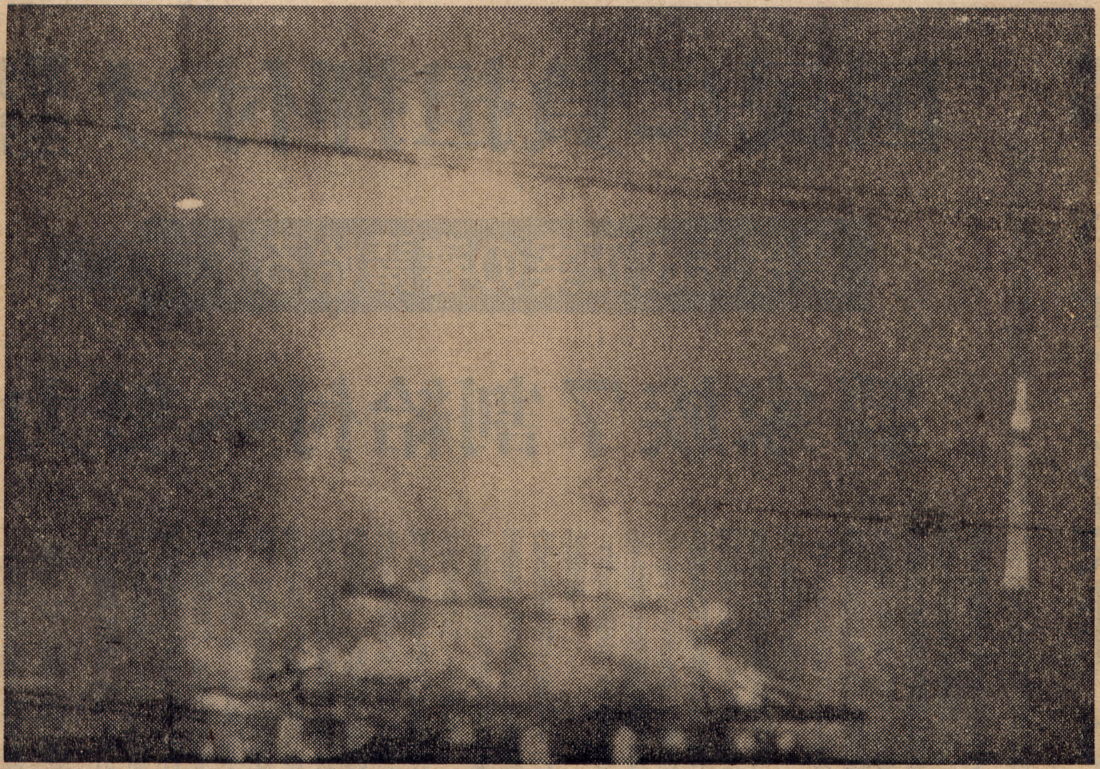
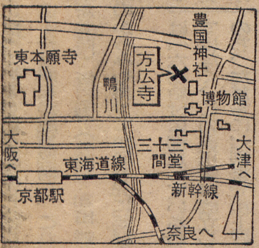


炎上する方広寺の大仏殿。右端は京都タワー（27日午後11時10分、京都市東山区大和大路正面上ル茶屋町で、同区渋谷通東大路西入ル、三宅宗純さん写す）

方広寺大仏殿焼く

京都 豊国神社屋根こがす



二十七日午後十一時すぎ、京都市東山区大和大路正面上ル茶屋町の方広寺＝木下寂俊住職（三五）＝の大仏殿付近から出火、空気が乾き、古い木造建築だったので、大仏殿約四百平方㍍が夜空を焦がして、またたく間に全焼。南隣の豊国神社の拝殿と社務所の建物にも飛火し、それぞれ屋根の一部をこがした。火は十一時半ごろ消えた。本堂、庫裏は無事。

出火と同時に大仏殿にあった弁天、大師、不動、不動の前立など五体の仏像は無事に運び出されたが、大仏は焼けた。

もえた大仏殿は、高さ約十六㍍、間口約十㍍もある。中には高さが十四㍍の木造の大仏が安置されていた。大仏殿の南側五㍍ほどのところに、重文に指定されている梵鐘（ぼんしょう）のある鐘つき堂があったが、無事だった。

消防車約二十台が出動したが、大仏殿は中が広く、窓を通して放出するホースの水も、燃える大仏にはとどきにくく、建物全体の火がおさまってからも、大仏はくすぶり続けていた。

庫裏で寝ていた見寺こよしさん（六三）は「大仏殿は午後五時ごろに閉め、そのあと、住職や私らが観光客のタバコのすいがらなどもみつけて歩くが、きょうは異常なかった」といっている。

同大仏殿は、午前八時から午後五時まで拝観時間になっている。最近は日に数百人が見にくる。内部には電線が通じている程度で、火の気はなく、同寺関係者は「どうして出火したのかわからない」といっている。

松原署の調べや、同寺の話によると、同日午後五時すぎ、タクシーで拝観客が訪れた。閉門時間の四時をすぎていたが、木下住職の弟の憲次さん（三三）が大仏殿内に案内した。このあとの同五時十分ごろ、憲次さんが寺の正門をしめ、大仏殿の観音開きのとびらをしめ、かんぬきを入れたあと、中の電気を消し、本殿に引揚げた。火の気がない場所なので、松原署では不審火とみて同住職や付近の人からさらにくわしい事情を聞いている。

木下寂俊住職の話 出火した時、私を含め寺の関係者計五人が焼けた大仏殿西側の本堂わきの庫裏で寝ていた。午後十一時すぎ、近所の人が庫裏の表戸をドンドンとたたくのであわてて飛び起きたら、大仏殿の上の
になっており、手の
かった。

「国家安
鐘銘文で

方広寺は豊臣秀
（一五八六）に、
仏殿にならって建
創建当初の大仏は
三尺（約十九㍍）。
五九六）の大地震で